

鈴木正章* : 報告 国際第四紀学連合第15回大会およびエクスカージョン

Masa'aki Suzuki*: Report—XV INQUA International Congress and its Excursion in South Africa

1999年8月3日～11日の9日間、南アフリカ共和国のインド洋に面したリゾート地、ダーバンの国際会議場 (ICC)において国際第四紀学連合第15回大会が開催された。参加者名簿によると、参加者は51カ国651名で、日本からの参加は25名であった。8月3日は1日中登録にあてられ、4日から実質的な会議が始まった。開会セレモニーにつづいて、全体会議、全体講演、本大会の主題である“The Environmental background to Hominid Evolution in Africa”のシンポジウム、一般シンポジウム、ポスターセッション、ビジネスミーティング、ワークショップと、様々な講演・発表・会議が持たれた。全体講演は4日の午後、およびそれ以外の日はシンポジウムとポスターセッションの終了した夕刻に行われ、会長講演を含む合計12件の講演があった。それらの講演の中には、放射性炭素年代の暦年代補正に関する講演“Calibrating the radiocarbon time scale”があり、今後の研究では、¹⁴C年代を暦年代に補正して統一されたタイムスケールで議論する必要性を痛感した。

口頭発表はシンポジウム形式で、ポスター発表もセッションごとにテーマが決められて、プログラムが組まれていた。このためポスターセッションの発表者の一部は、希望したセッションとまったく関係の無いセッションに組み入れられてしまい、十分な討論ができなかったという不満の声が聞かれた。

植生史研究に関連すると思われるシンポジウムやポスターセッションは以下の通りであった。

シンポジウム

S06.2. Combining palaeoenvironmental observations and modelling to understand past climate changes within the palaeoclimate modelling intercomparison project.

S06.3. Isotope Stage 3 model-data comparisons.

S10.1 (A). Carbon cycle changes: peak glacial versus interglacial conditions.

S10.3. Modern pollen deposition, tree-lines and climate.

ポスターセッション

P02. Ice Age glaciation and mountain environments in north and high Asia.

P05. Holocene history of Mediterranean ecosystems.

P09. Extreme events in the Quaternary record.

P10. Quaternary sedimentary records and their palaeo-

environmental interpretation in Central Africa.

P12. Palaeo-France: palaeoenvironments and man in France during the Last Glacial Maximum and Holocene Optimum.

P18. The Map Room: a combined exhibition of maps of Quaternary environments.

P21. Pollen workshop: biodiversity in sub-Saharan Africa, past and present (African Pollen Database; IGCP 431; EC INCO-DL).

P24. Ice age indicators in tropical forest environments.

P41. Past climate variability in Europe and Africa: PEP III (the Pole-Equator-Pole transect through Europe and Africa).

P42. Long Pleistocene records.

また日本植生史学会会員の発表は以下の通りである。

Endo, K. and Murata, T.: Abrupt environmental changes in the Pleistocene/Holocene transition in Taihu plain, Yangtze Delta, China in comparison with Kanto Plain, Japan.

Kariya, Y.: Latest Quaternary landscape evolution of a snowpatch hollow in Gassan, central Japan.

Hoshino, F.: Palynological evidence of late Holocene spread of *Quercus* at Oyachi Moor in Niseko district, southern Hokkaido (ca. 43°), Japan.

Maeda, Y.: Holocene sea level changes in the Philippines.

Murata, T. and Endo, K.: Abrupt environmental change of Tai-Hu Lake in China, focussed on the last 5000 years.

Suzuki, M.: Abrupt Changes in delta sediment since the latest Pleistocene in South Hokkaido, Japan.

最終日に行われた全体会議では、次回第16回大会が2003年にアメリカ合衆国ネバダ州リノで開催されることを決定して、この大会は終了した。

この大会のエクスカージョンは、プレ巡検7コース、ポスト巡検9コース、プレとポストおよび8月8日の1日巡検6コースの合計22の巡検が企画された。これらの中で筆者が知る範囲では、ポスト巡検のB5: Eastern Cape High Altitudeが案内者の都合により中止になったが、幸いにも同コースでプレ巡検が実施された。

このうち筆者は、8月12日～16日の4泊5日を実施さ

れた B7: Northern Cape の巡検に参加した。

この巡検は、西はカラハリ砂漠の南端から東はキンバリー周辺まで、おもに北ケープ州一帯に広がる地形と地質、および人類遺跡を含む考古遺跡を見学することが目的であった。

初日、バスはヨハネスバーク空港近郊の INQUA が用意したホテルや集合場所の空港を経由して、一路目的地のキンバリーに向かった。到着後、市内の McGregor 博物館に立ち寄り、案内者の Peter Beaumont 氏と合流した。夕刻、予定を繰り上げて、キンバリー鉱山博物館内にあるダイヤモンド坑で有名な Big Hole の見学からこの巡検が始まった。このダイヤモンドを含む地層、キンバライト層は古生代～中生代のカルー系を貫入して形成されたもので、ダイヤモンドはこの貫入岩に沿って採掘された。現在は掘り尽くされてしまい、その跡は深さ 383 m、周囲が 1.6 km の大きな穴として博物館に保存されて、Big Hole と呼ばれている。

この巡検の見どころは、キンバリーから北へ国道 14 号沿いに 134 km 北上した、タウング郊外の Norlim 集落にある遺跡であった。ここは、世界最初のアウストラロピテクスが発見された人類遺跡として有名である。

この付近の地質は石灰質のトゥファ (tufa) という堆積物で、Ghaap 台地を構成するドロマイト層から湧き出る泉によって培われた。この堆積物の石切場から、1924 年に M. de Bruyn によって推定年齢 3 歳の子供の頭骨が発掘された (写真 1)。その後、当時、ヨハネスバークの

Witwatersrand 大学の教授をしていた Raymond Arthur Dart は、この頭骨をアウストラロピテクス・アフリカヌス *Australopithecus africanus* と命名した (Dart, 1925, 1926)。またタウングから発見された子供であることから、タウング・チャイルドあるいはベイビーとも呼ばれている。残念ながら、Dart がこの頭骨の重要性に気づいた時には、すでにこの遺跡は掘りあげられてしまっていたため、この人類化石が出土した証拠として残っているのは、洞窟を充填する堆積物から頭骨が出土した際の写真、およびそれに付随して出土した小さな動物の遺物の写真だけである。また案内者の説明によると、この人類化石の年代は、前述の洞窟を充填する堆積物 (Dart deposits) 中に絶滅種のヒヒ *Parapaipo broomi* の化石が含まれることから 250 ~ 320 万年前であると推定されている (McKee, 1996)。しかし、その地を訪れる期待は大きかったものの、見学した場所にはただ出土地点をしるした石碑が建っているだけで、その他にこの人類化石の出土を物語るものはなかった。

その他、地形学的にももしろいものとして、キンバリー郊外の Nooitgedacht 付近ではオレンジ川支流のパール川沿いに発達する新生代の段丘堆積物や、国の天然記念物にも指定されている始生代末期～原生代の安山岩の表面を後期石炭紀の氷河が削ってきた擦痕やチャターマーク、カラハリ砂漠の南西部 Floradora にあつて最終氷期最盛期には活発に活動したが、現在はほとんど植生に覆われて活動を停止している化石縦列砂丘、地下水によって漂白された砂で形成された Witsand の白い砂丘などを見学した。ま



図 1 タウング・チャイルド *Australopithecus africanus* の頭骨の複製。

た遺跡として、アシュリアン文化～ファウアスミス文化以降のハンドアックスをはじめ多数の遺物を出土したバルー川上流パークリーウエストのCanteen Koppie 遺跡、ドリーネの凹地に立地するKathu Pan 遺跡、Danielskuilの北約50 kmにあるGhaap台地ドロマイト層を地下水が溶食して形成された奥行き139 mの横穴Wonderwerk Caveの洞窟遺跡、パークリーウエスト南東10 kmのバルー川岸にあり洪水堆積物によって埋積されたPniel 6遺跡を見学した。この巡検の最後には、キンバリーから北西約12 kmの国道31号沿いにある広大なWidebeestkuil農場において、ストーンサークルの一個一個の石にブッシュマン族が彫刻して描いた人々や動物などの絵、すなわち岩面美術（rock art）を見学した（写真2）。

この巡検に用意されていたガイドブックはA4サイズで47頁にも達し、内容も見学地ごとに位置や解説が丁寧になされていた。さらに現地では、案内者より、遺跡ごとに出土した化石や石器などの遺物が用意されていて多いに役立った。

今回参加した巡検は、期間が比較的短い割には盛りだくさんのテーマが設定されていて、やや消化不良気味では

あったが、日本にはなかなか見ることのできない南アフリカの自然や文化遺産の一端に触れる貴重な体験をすることができた。

最後に、この巡検を準備され、案内をして下さったMcGregor博物館のPeter Beaumont氏に厚くお礼を申し上げたい。

なお、今回の大会における巡検の報告が一部ホームページ<http://inqua.nlh.no/congress/excur.html>で公開されているので興味のある方は参照されたい。

引用文献

- Dart, R. A. 1925. *Australopithecus africanus*: the man-ape South Africa. *Nature* 115: 195-199.
 Dart, R. A. 1926. Taungs and its significance. *Natural History* 26: 315-327.
 McKee, J. K. 1996. Faunal turnover patterns in the Pliocene and Pleistocene of southern Africa. *South African Journal of Science* 92: 111-113.

(* 〒061-1196 北海道北広島市中の沢149 道都大学短期大学部 Dohto University, Junior College, 149 Nakano-sawa, Kitahiroshima, Hokkaido 061-1196, Japan)



図2 ブッシュマン族の岩面美術。

査読者への謝辞

植生史研究第7巻に投稿された論文等は下記の方々に査読していただきました。記して御礼申し上げます。

神崎 護	仁藤 敦史	守田 益宗	山田 昌久
辻 誠一郎	百原 新	安江 恒	依田 清胤